

私の歩んだ道と論文への解題

新 福 尚 隆[†]

The Track of my Life and the Explanatory Notes on my Works

Naotaka Shinfuku

はじめに

このたび、西南学院大学・人間科学論集に古希記念号を出版していただくことになり、今までの歩んできた道、書いてきた論文を纏める機会を与えていただいた。私の歩んできた道を紹介すると共に、なぜこうした論文を書くようになったかその由来・内容・出版の経緯を紹介したい。

1. 生育及び教育

私は1942年1月に台湾の高雄市で生まれた。物心のついたころは、台湾は戦争末期で空襲が連日あり、防空壕に避難したりの日日であった。子供心に、恐怖にさらされ不安であったのか母親にまとわり就いていたようである。終戦後1946年2月の引き揚げ船で帰国した。帰国後、1年間は、福岡市・六本松の近くの母の実家に世話になった。このとき近くの幼稚園に入園したが母親の姿が見えなくなると逃げ帰るので幼稚園はあきらめられた。引き上げ後しばらく無職であった父は、1年後に太宰府市五条にある福岡県立筑紫保養院（現在福岡県精神医療センター）に精神科医として職を得た。私は、太宰府天満宮の近くの大宰府小学校に入学した。小学校もはじめのころは母親からの分離不安で不登校であった。登校するようになったら、授業中机の上に登って歌をうたっ

[†]西南学院大学人間科学部教授、神戸大学医学部名誉教授

たりで、現在であれば「小児期に発症する行動及び情緒の障害」という診断が付いたと思われる。

こうした幼児期体験が、その後長く、外傷後心的ストレス症候群（PTSD）に興味を持ち続ける原動力になっているのではないと思う。また、台湾で生まれたことがアジアへの親近感の源かもしれない。小学4年の時に、父の転勤に伴い鳥取県米子市に転居した。中学校、高等学校を米子で過ごし、郷里の九州大学医学部に入学した。大学を卒業した1967年は、青年医師連合（青医連）の運動の最中で、全国の医学生が医局講座制反対、国家試験ボイコットを唱えていた。卒業後、しばらくして、国立福岡中央病院神経科に勤務した。

2. 臨床医として及び留学

国立福岡中央病院神経科で1年間の勤務をした。このときに、救急で入院した過呼吸症候群の若い女性の症例報告が私の初めての論文になった。このとき指導いただいた上司には今でも感謝している。初めての論文を書くことは容易ではない。1年後、1970年、佐賀県神埼郡にある国立肥前療養所（現在佐賀精神医療センター）へ転勤となった。ここで、慢性の統合失調症が殆どを占める男子閉鎖病棟を担当した。クロールプロマジン、ハロペリドール等の向精神薬の投与が主体であったが、慢性の統合失調症患者の集団を前にして無力感にさいなまれ茫然自失した。統合失調患者は、我々人間の文化圏の枠外に存在しているかのように思えた。このときに、慢性患者の無為、自閉、意欲の低下、感情鈍磨という症状を治療状況への反応として理解できないかと考えた。フランス政府科学部門の留学生試験が福岡であり1971年にフランスに留学した。パリ大学医学部精神科のピエール・ピショウ教授の元での留学であった。入院病棟では、トルコ人、スペイン人などフランス人以外の国籍の患者も少なくはなかった。彼らのフランス語は、留学生である私と同じ程度に下手で、フランスでの言語の習得、文化適応の失敗が入院へいたる過程に影響を及ぼした事が推測された。フランスで地域精神医療の新たな動きがあることを知り留学一年後にパリ13区の地域精神医療センターに留学先を変更した。ここでデイケアを拠点にして、地域の患者のアパートを3-4人の多職種のチームで訪問し

た。一人で昼間からワインを飲んでいるアルコール中毒の独居老人の多いことに驚かされた。第二次世界大戦後の、フランスでの地域精神医療の形成過程、組織の実態等を学んだことは大きな成果であった。帰国後、フランスの経験は、「フランスの地域精神医療」、「パリ 13 区の地域精神医療」として論文に纏めた。留学前に抱いていた、慢性の統合失調症患者の症状に関しては、脱施設化に関する様々な論文を読むことで理解が進んだ。現在でも、文化や状況が、個人個人の心のあり方に与える影響に強い関心を抱いている。私にとって、様々な周囲の状況が個人に及ぼす影響への興味が、社会精神医学、多文化精神医学への関心の源になっている。私が留学した、1971 年から 1974 年はフランス文化が華やかな頃であった。誰でも聴講できるパリ市の市民公開講座 (College de France) では、文化人類学のレービー・ストロウス、精神医学者で哲学者のミシェル・フーコーが講義をしていた。留学先のサンタンヌ病院では、ジャック・ラカンが患者の診察を行っていた。国立肥前療養所からの派遣はもともと 1 年であったが、フランス政府国費留学生として 2 年 10 月の期間フランスに滞在した。1974 年 3 月に帰国し、4 月から国立肥前療養所へ復職した。

肥前療養所の臨床では、急性期病棟、老人病等を担当した。研究面では、若い同僚と協力して全入院患者の実態調査を行い、長期在院の理由を症状、社会的要因、施設側要因から分析した。これ等の結果を 1975、1976、1977 年にわたり、「精神科医療における長期在院の研究、第一報、第二報、第三報」として九州神経精神医学に発表した。また、向精神薬の副作用に関心をもち、肥前療養所での死亡例の検討を行い「国立肥前療養所過去 10 年間の死亡例の検討 - 向精神薬と死亡例の関連を中心にして」を九州神経精神医学を発表した。これ等の臨床の現場での研究は、社会精神医学的な疫学研究でありそれ以来の私の研究の方向の基礎となった。フランスにおける経験と、肥前療養所の入院患者の実態調査を基に、「精神科医療における Institutionalism の概念」の論文を纏めた。この論文で、肥前療養所で慢性の統合失調症患者に出会い、彼らを前に抱いた疑問のいくつかに答えることが出来たように感じた。

3. 行政という異文化

厚生省で留学の報告を行った際に、国立療養所課長の太谷藤郎先生から、私の年代の厚生省の技官が少ないこと、精神医療システムに興味があるなら厚生省で仕事をしたらどうかと勧められた。太谷藤郎先生は、精神障害者やハンセン病患者の偏見の除去に尽力をされ、後ほど「らい予防法」の廃止の原動力になられた。そのときは、臨床に興味があり、厚生省で仕事をする事には殆ど関心がなかった。肥前療養所での臨床や調査、研究が一段落ついたころ所長より話があり、出向という形で、厚生省の国立療養所課で課長補佐として勤務をするようになった。36歳のときである。当時150箇所以上あった国立療養所は、結核患者の減少に伴い、精神疾患、重症心身障害、肺癌等の呼吸器疾患、さらには脳卒中のリハビリテーション等の分野への性格転換を余儀なくされて、精神神経疾患分野の臨床経験のある医師を必要としていたのである。私が勤務した、1978年から1981年にかけて、国立療養所課では、神経疾患研究委託費の創設、国立精神神経センターの整備、国立療養所の性格転換と新たな機能づけ（例えば、国立アルコールセンター、国立てんかんセンター）などが行われた。また、全国13箇所のハンセン病療養所を国立療養所課が管轄していた事もあり、ハンセン病療養所への医師の確保など難しい課題にも直面した。厚生省での勤務が2年を過ぎたころに、世界保健機関・西太平洋地域で精神保健部門の担当官の募集があり勧められ応募した。勤務地は、フィリピンのマニラ市であった。

4. 世界保健機関での13年間

1981年6月、WHO職員としてマニラの生活が始まった。当初、13年間も長く勤めるようになるとは夢にも思わなかった。世界保健機関は、192カ国が加盟している保健医療分野の国連の専門機関であり、本部はジュネーブにあり世界を6つの地域事務局に分けている。本部は、世界の健康に関する情報の収集、統計、安全基準の作成、全体のプログラムの企画・立案を行っている。地域事務局は、加盟国からの要請に基づき、それぞれの国での個別の健康課題に関する技術援助、教育、訓練、資材の提供などを行っている。西太平洋地域事務局に属するのは、中国、韓国、日本等の東アジア、フィリピン、シンガポー

ル、マレーシア、ブルナイなどのアセアン諸国、ベトナム、ラオス、カンボジアなどのインドシナ諸国、パプアニューギニア、フィジー、トンガ、サモア、マイクロネシア等の南太平洋の国々、オーストラリア、ニュージーランド等の30数カ国・地域であった。日本も経済発展を遂げる前は、沖縄のマラリア撲滅等にWHOの技術支援を受けていた。精神医療の分野では、1960年代に、欧米から専門家が日本を訪問し、日本の精神医療の再編成の時点で、問題点を指摘し今後のあるべき姿を提示している。英国のDr David Clarkの報告者はクラーク勧告として日本でも知られている。日本においてはWHOの勧告は取り入れられず、現在のような入院が中心の問題を抱えた精神医療となった。

WHO・西太平洋地域事務局での私の役職は、精神保健及び薬物依存に関する地域顧問 (Regional Adviser in Mental Health and Drug Dependence) であった。

大変幸運であったのは、私が赴任した当時のWHO本部 (ジュネーブ) の精神衛生部の精神衛生プログラムは、部長のサルトリウス博士のもとで活発に展開されていたことである。赴任後、しばらくして要請を受けたのは南太平洋の国におけるアルコール問題への対応であった。パプアニューギニアは1970年代に独立したが、それまで飲酒を許されていたのは信託統治国のオーストラリア人をはじめとする白人のみであった。パプアニューギニア住民にとって、独立は自由にビールが飲めるようになった記念日でもあった。1970年代には、パプアニューギニアのみでなく、マイクロネシア、フィジー、トンガ、サモア等のパラダイスの様な南太平洋の島国で欧米文化の流入とともに急速なアルコール関連問題が発生した。WHOは、そうした国々へ広い範囲にわたるアルコール政策 (National alcohol policy) を確立する為に数多くの専門家を派遣し、法的整備、必要な調査研究、保健関係者への健康教育を行った。また、1970年代から、マイクロネシアでは、自殺の急激な増加があり、その対応へのWHOの支援が求められた。

アルコール問題の対策、自殺予防対策でマイクロネシアをしばしば訪問した。現地でも、長らく自殺防止活動をしていた牧師 (Father Hezel) との会話で、伝統的な文化や社会秩序を破壊した最大の原因は何かと尋ねたら彼が一言

“Money 貨幣”と答えたのが印象に残っている。貨幣経済の導入、アルコールの飲酒は南太平洋諸国の人々のメンタルヘルスに大きな影響を与えたのである。

私の担当した精神保健分野での、主要な仕事は、東アジアの国々での、精神医療サービスの範囲の拡大、質の向上であった。1981年、赴任した年に、中国の南京で、中国政府と共同で「児童精神医学」のWHOワークショップを開催した。各国の専門家が、中国政府の一人子政策の、心理的影響に関して意見の交換を行った。外国の知識を取り入れたいという中国の精神科医の熱気に圧倒された。そのあと毎年、中国の各地で中国政府と共同で、精神保健の重要な課題に関してワークショップを行った。その後も、毎年、司法精神医学、精神保健法、精神療法、地域精神医療等に関するWHOワークショップを中国各地で開催した。文化大革命を終了した中国で、精神医療の形成、進展に13年間の長きにわたり関わることができたのは望外の幸運であった。

中国以外でも、韓国での精神衛生法の成立、ベトナムの精神医学教育、ラオスでの地域精神医療の促進、カンボジアでの精神医療体制の再構築などのプロジェクトへの支援を行った。また、1980年代後半に、中国雲南省でヘロインの静脈注射によるエイズの蔓延が起これ、その問題の対応がWHOに依頼された。中国政府も取締りのみでは、効果がなく、予防教育、早期発見、早期治療、リハビリテーションの重要性を認めるようになった。中国の麻薬対策に関しては、北京、雲南省の首都の昆明、香港、マカオで、WHO主催の教育訓練プログラムを何度も開催した。

私にとってWHOでの仕事は、大変遣り甲斐のある楽しいものであった。各国でのプロジェクトの企画、予算の獲得、実施のサイクルを繰り返して気がつけば13年が経過していた。私がマニラに赴任した1981年には、1ドル273円であったが、1994年には1ドル90円を割り、子供の教育のために帰国していた家族から、WHOの給料では生活できないとの訴えがあり帰国を考えるようになった。長年、仕事をともにしてきたサルトリウス博士は1993年にWHOを去っていたのも帰国を考えた一因でもあった。

WHO西太平洋地域事務局では、加盟国での訪問に際しては、報告書(Mis-

sion Report) の作成が義務付けられていた。報告書は、加盟国への精神保健分野での政策提言であり加盟国へ送られ、また WHO の公式文書として保管される。WHO マニラ事務局での勤務の 13 年間に 120 を超える報告書を作成した。報告書の作成は、大変であったが、神戸大学での教授選にあたり、WHO 報告書は論文として評価いただいた。

5. 神戸大学・医学部での 11 年

1994 年、神戸大学医学部・医学研究国際交流センターの疫学・調査部門の教授として 13 年振りに帰国した。私は、助手や講師といった文部教官の経験は全くないままに教授に就任した。神戸大学への赴任後しばらくの間は、何をすれば良いのか途方にくれた事を覚えている。浦島太郎症候群とも逆カルチャーショック (reverse culture shock) ともいわれるがフィリピンから日本へ、国際機関から大学への文化適応は容易ではなかった。私の担当は国際保健学であり、私はここで、先ず、肝炎、マラリア、タラセミア等のアジアの途上国に多い感染症の勉強をした。

1994 年の夏休みには、学生を連れてインドネシアのスラバヤを訪問した。スラバヤはインドネシア第二の都市であり、ここのアイルランガ大学医学部は、神戸大学の共同研究の重要な協定校であり、日本国際協力事業団による熱帯医学センター設立の計画があった。アイルランガ大学での熱帯医学センターの設立と準備が、私にとっての大きな仕事になった。スラバヤへは年に数回訪問し、アイルランガ大学の熱帯医学研究センターは数年後に完成した。建物 5 億円、研究用機材 2 億円、そのほか含めて約 8 億円のプロジェクトである。

神戸に赴任して半年後の 1995 年 1 月 17 日、火曜日の朝に、阪神淡路大震災に遭遇した。インドネシアから帰国した翌日であったことを覚えている。震災直後から、米国の NOVA (National Organization for Victim Assistance) をはじめ、外国から災害専門の NGO が数多く神戸を訪れ、彼等の対応を任された。彼らは、日本の専門家に災害精神医学、PTSD の概念、心の支援の必要性を熱心に伝えた。疫学調査研究担当ということで神戸大学の震災研究の医学部門の研究のとりまとめを依頼された。震災後、外国の専門家と被災地をまわったり、

震災体験に関する報告や論文を依頼されたり、多忙を極め、数ヶ月で燃え尽き状態になった。ストレスのためか高血圧と激しい胃の痛みで悩まされた。6月にフィリピンへ出張した時、飛行機が関西空港を出発すると、長らく続いていた胃の痛み、肩こりは嘘のように消えた。マニラで楽しく一週間をすごした。帰路、飛行機が神戸に接近すると胃の痛みが再発した。ストレスは災害の現場を離れると軽減することを学んだ。

阪神淡路大震災は、個人的にも大変な経験であったが、その後10年間にわたり現地で、町の復興、被災者の心身にわたる健康問題の推移を観察する機会を得たのは貴重な体験であった。阪神淡路大震災を体験し、被災者が生存者、救済者になることで救済されるとの気持ちを持つに至った。震災に関して、日本学術振興会の支援で、フィリピン大学と共同でマニラで災害防止に関する大きな国際会議を開催した。また、日本国際協力事業団の支援を得て、神戸大学・国際交流センター主催の途上国の医師、防災専門家を対象の研修コース（一月間のコースで毎年6名の研修生、トルコ、中国からの研修生が多かった）を、2000年から5年間継続した。阪神淡路大震災の経験を、論文を纏め外国に発信した（pub med で shinfuku disaster で検索可能）。

大震災がある程度落ち着くと、インドネシア、フィリピン、シンガポール、タイ、マレーシアとの共同研究を開始した。センター長に就任したこともあり、従来の、感染症中心の共同研究のテーマに精神保健を加えた。1999年には、シンガポール大学と共同で、神経薬理学分野でのシンポジウムを開催した。そのときに、参加した国々の間で 向精神薬の処方、国により随分と異なる事が話題になり、共通のプロトコールを作成し多国間の共同研究を開始した。この共同研究は、後に東アジアにおける向精神薬処方調査（REAP：Research on East Asian Psychotropic Prescription Pattern）として知られるようになる。

この研究の開始には、アジアの国々が参加できる国際共同研究をアジアで組織したいという動機があった。個人的には日本の向精神薬の処方を、国際比較を行うことで改善したいとの思いがあった。2001年、2004年、2008年と中国、韓国、日本、台湾、シンガポール、香港の東アジア儒教圏の国々から、毎回2,000例を超える入院統合失調症患者の処方を集め、分析することができた。

アジアの国々における最大、最長の精神医学分野における共同研究に育っている。この研究に関しては、英文で10篇以上の論文が、かなりのインパクト・ファクターの専門誌に掲載されている（Pub Med：N Shinfuku）。日本語でも、論文が発表されてアジア各国と比べての日本の抗精神病薬処方の特徴が明らかにされた。

2002年8月、日本精神医学会100周年を記念して横浜で世界精神医学会横浜大会が開催された。これは日本で開催された精神医学分野での最大の国際会議であり、日本の精神医学が、それまでの内紛を脱し、世界に眼を向ける大きな契機になった。2001年には、旧知のサルトリウス博士が、神戸大学国際交流センターの客員教授として3ヶ月神戸に滞在し横浜大会のプログラム委員長として学会の準備をされた。

神戸大学の疫学調査研究部門の大学院生として、中国、モンゴルなどからの留学生も増えて、合計10名の学生が私の指導の下で博士号を取得した。福岡出身の坂巻路可先生は栄養学分野で、肥満調節に関するホルモンの研究で多くの論文を書かれた。卒業後、西南女学院に就職されている。北京大学からの留学生、王 向東氏（Dr Wang Xiang Dong）は優秀で中国北部での震災被災者のPTSDに関する論文はAmerican Journal of Psychiatryに掲載された。王氏は、博士号所得後、北京大学の教授になり、しばらくして私の後任として、WHO 西太平洋地域事務局の精神保健・麻薬問題の担当官に就任した。神戸大学での最終年の2004年10月には、世界社会精神医学会が開催され、地元の教授としてまた国内学会の担当者として参加した。大変な盛会であった。2004年12月には、スマトラ沖の大地震・津波がおき、神戸大学医学部の先遣隊としてスラバヤを訪問した。2月にはインドネシアの専門家、日本の災害精神医学の専門家を招いて神戸大学・医学部でシンポジウムを開催した。2005年3月に行った、神戸大学での最終講義の演題は、「神戸大学の11年、地震に始まり津波に終わる」であった。

6. 西南学院大学での7年

平成15年4月から郷里の福岡市にある西南学院大学・人間科学部・社会福

社学科に勤務するようになった。私が、赴任をした3月に福岡西方沖地震がおき、4月には大きな余震があった。地震にはよくよく縁のあるものと思われた。

大学では、社会福祉士、精神保健福祉士の資格を目指す学生に医学一般・精神医学・精神保健学の講義を行うことが主要な任務である。1学年150名を越える学生に講義をするのは新鮮な経験であった。学生の実習先の老人保健施設、児童保護施設、身体障害者施設、精神障害者の社会復帰施設等を訪問して、医師として医療の世界にいた私が、いかに福祉の世界の現状に無知であったかを知らされた。老人医療施設を訪問して、生命維持のために「胃ろう」をした末期の認知症患者の多さにショックを受けた。

2005年の暮れにエジプトのカイロで行われた世界精神医学会で、日本精神神経学会の推薦を受けて世界精神医学会の東アジア地区を担当する第17地区の地域代表に選ばれた(WPA Zonal Representative for the Zone 17 East Asia)。WPA Zone 17には、モンゴル、中国、韓国、日本、香港、台湾が含まれる。WPAの地区代表として、これらの国々の精神医学、精神医療の向上、交流の増加に努めた。3年後の2008年夏に、プラハで開催された世界精神医学会でも再選された。研究面では、様々なテーマに関して、国際共同研究をアジアの国々の精神科医と企画、若手の精神科医と共同で調査を行った。従来からの「東アジアにおける抗精神病薬の処方調査」の研究の成果は、国際誌に若いアジアの研究者をfirst authorとして掲載された。そのほか、アジアの国々で精神疾患の診断基準が異なることに気づきアジアの国々におけるICD-10、DSM-4の使用を調べ、中国ではICD、韓国、台湾ではDSMの使用が一般的であることを明らかにした。最近では、新型うつ病、引きこもりに関して典型的な症例を提示し、それらをどの様に判断するのか各国の研究者に意見を聞いて、それらが日本独特の病態でないことを明らかにした。最近、生まれ故郷である台湾を訪れる機会が増えた。今年の11月には生まれ故郷の高雄で、台湾で始めての世界精神医学会・地区会議が開催され、アジアの精神医学に関する講演を行った。11月には、マレーシア・クアラルンプールで開催された国連大学国際保健研究所(United Nation University-International Institute for Global Health)でエイズと精神保健に関するセミナーとワークショップがあり、招待され講演を

行った。

おわりに

西南学院大学の7年間は、あっという間であった。上述した論文は、殆どは専門の精神医学分野のものである。私は、長年の経験から学生に論文を書かせ、指導することが楽しみである。私の論文のリストの中で、西南学院大学で、私が指導した大学院生の為数氏と岩崎氏の論文がある。共に、peer reviewのある一流の専門誌へ掲載された。

4年生の私のゼミの学生にも卒論を書くように指導しており、毎年12-18名の学生が1万6千字以上の論文を纏めている。Copy and pasteが目につくが私は、学生が、動機、目的、方法、調査結果、考察、結論、文献という論文のスタイルで、ものを考え纏めることは、極めて有意義な学びであると考えている。今年は最後の年で、私のゼミを希望する学生を全員引き受けて合計27名になっている。学生には、できるだけ自分の経験、自分の興味、自分の判断で論文を書くように指導している。現時点で、どれだけの数の学生が論文を仕上げるか未知数である。西南学院大学での7年間、学生の講義、大学院生の指導、社会福祉や精神保健福祉施設への実習巡回、学生相談室でのカウンセリング、チャペルでの講話、震災に関係しての市民公開講座、留学生への講義と様々な経験をさせていただいた。

大変楽しい7年間であった。ここでお会いした学生、教職員の皆様に厚くお礼申し上げる次第である。また、人間科学部、社会福祉学科のますますの充実と発展を希望して筆を置きたい。

追記：本論文は「多文化間精神医学と私の歩んだ道」(心と文化 第10巻2号)を元にしてている。